

子どものピアノ演奏指導における
「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究

西濱 由 有

愛知東邦大学

子どものピアノ演奏指導における 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究

西濱 由 有

目 次

- I はじめに
- II 先行研究との対比による本研究の意義
 - 1 保育者養成校のピアノ指導における「楽曲イメージ奏法」の効果
 - 2 イメージとピアノに関する研究
 - 3 イメージと音楽に関する研究
- III 研究の目的と方法
 - 1 研究の目的
 - 2 研究の方法
- IV 研究の結果
 - 1 子どものイメージ楽譜
 - 2 音楽的特徴に対する思考の変化
- V 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する考察
 - 1 楽曲のイメージが豊かになる
 - 2 音楽的な表現意欲の向上
 - 3 視覚的な楽曲分析の効果
- VI 保育者養成校の学生との比較
- VII 「楽曲イメージ奏法」の効果について
- VIII おわりに

I はじめに

小学校学習指導要領によると小学校音楽の目標は表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。と示されており、第1学年及び第2学年における目標は（1）楽しく音楽にかかわり、音楽に対する興味・関心をもち、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。（2）基礎的な表現の能力を育て、音楽表現の楽しさに気付くようにする。（3）様々な音楽に親しむようにし、基礎的な鑑賞の能力を伸ばし、音楽を味わって聴くようにする〔1〕と記されている。ピアノ演奏も歌を歌う時の様に、イメージした情景を思い浮かべながら演奏できたら、それは子どもにとって楽しく、表現が豊かになる手がかりとなるのではないか。

また小学校学習指導要領の音楽科改訂には、言語活動の充実により、鑑賞領域の各学年の内容

に、感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を位置付け、楽曲や音楽の楽しさに気付いたり、楽曲の特徴や演奏のよさに気付いたり理解したりする能力が高まるよう改善を図った〔1〕と記されている。

筆者は2011年後期に保育者養成校の学生に「楽曲イメージ奏法」の実践を行った結果、学生のピアノ演奏において、楽曲のイメージが豊かになり、表現意欲が向上した。また楽曲分析をする上で彼らは大きな成長を遂げた。この取り組みを子どもたちが楽しみながら学べるピアノ学習法として実施すれば、彼らの表現力が向上してイメージが豊かになるのではないか。本研究は子ども自身が音楽から感じ取った事を、自分自身の言葉で表現して、音楽の楽しさを体で感じて表現を豊かにする為に、ピアノ曲の学習において「楽曲イメージ奏法」を実践する。そしてこの実践によって音楽的特徴における意識がどの様に変化したかを明らかにする。

Ⅱ 先行研究との対比による本研究の意義

1 保育者養成校のピアノ指導における「楽曲イメージ奏法」の効果

2011年後期「幼児の音楽」の授業で、筆者は保育者養成校の学生に「楽曲イメージ奏法」の実践を行った。武本が提唱する「楽曲イメージ奏法」とは、自ら演奏会や講座で実践し、教育現場で積み重ねてきたピアノ演奏法、及び音楽鑑賞法であり、その手順については下記の研究手順の部分で詳しく述べる。筆者はそれを学生が授業内で取り組み易い内容に改善して実践した。

その概要は、楽曲からイメージできる身近な題材を決めて、その楽曲に合う物語を創作して、イメージに合う色を色鉛筆で楽譜に着色する。そして5、10、15回目の授業におけるクラス内発表会で演奏する。また意味深い実践を目指して音楽と造形の繋がりを深める為に、楽譜を着色した後イメージするイラストや模様を加える事と、15回目のクラス内発表会では楽曲全体をイメージ画を八つ切り画用紙に描く事を課題とするというものである。

この研究の結果、学生は曲のイメージや表現について、学習を始めた早い段階から意識できる様になっており、質問紙によると「考えながら弾く様になった」「自然に指がメロディーを覚えてくれる様になった」と言っている。これは曲のイメージを豊かにする事によって、自分自身がこんな表現をしたいという意欲を強くする事にも繋がったと言える。また白黒で書かれている楽譜に着色する体験を通して、場面の変化やフレーズ感を大切にして、変化に富んだ演奏をしようと意識する様になった。保育者を目指す学生が自ら表現する意識を持ち、楽曲の持つ世界観を自分なりに解釈する事は、とても意義があり彼らの今後の音楽活動に必ず大きな影響を与える物である事が分かった〔2〕。

2 イメージとピアノに関する研究

ピアノを演奏する際に自分なりのイメージを思い浮かべている奏者はどの位いるだろうか。イメージとピアノに関する研究についてどんなものがあるか調査した。

加藤、伊達は他の学生のピアノ演奏を聴取して、その印象をイメージ画で表すイメージ画描写

学習を行い、その結果「学生が作品に対してイメージを持つことに対して積極的に考え、音楽の持つ多様性や奥深さを感じていることがわかる [3]」と考察しており、夏目は子どものピアノ演奏に「動物イメージ」を活用して『動物イメージ奏法』と名付けた。そしてメロディーから感じられる動物をイメージしてその奏法を見つけて、曲想豊かな演奏が出来るようになったかを検討した結果『動物イメージ奏法』について「子どものピアノ学習と演奏に大変効果的である。しかし、曲の部分ごとにイメージをつけ、曲全体の構成をするには、いろいろなイメージが持てるようになる必要がある [4]」と述べている。上記2つの研究については以前にも表記しているが、以下にイメージとピアノに関する他の研究について述べる。

小林仁は「正しいけれどもおもしろくないという演奏はどこか本質的な点で間違っています。自分なりの音のはっきりしたイメージを持ち、技術的にも訓練を積んでいる演奏は、かならず聴いていておもしろい音楽になっているはずです [5]」と記しており、今までの日本はどちらかというと技術ばかり優先されてしまい、音に対するイマジネーションに欠けている事を嘆いている。また自分自身が何を言いたいかをはっきりさせる事が大切であり、それが無ければきっと曖昧な演奏になってしまうという危険性を示唆している。小林が示唆する通り、特に子どもの時期には技術を優先して「指が動く事が嬉しい」とか「スラスラ弾けて嬉しい」という傾向もあるが、今回の研究では音楽を自分なりに消化して味わう事でその傾向を少しでも食い止めた。

3 イメージと音楽に関する研究

ゲルハルト・マンテルは「音楽という手段でもってなにかしら意味の通じる会話をする事はできませんが、イメージによって引き起こされる感情ははっきりと伝えることができます。逆に意味が特定されていないことがいいのです。同じ感情を抱いていたとしても、実はイメージの仕方はさまざまだったりします [6]」と述べている。また演奏解釈はさまざまであり、演奏者ひとりひとりが正しい演奏を求めて、曲の意味を真剣に追求しなくてはならないと記している。本研究で楽曲に対して子ども達がイメージする事柄は、子どもたち自身のこれまでの体験や見聞きしたものである事が予想されるが、そのイメージによって引き起こされる感情を真摯に表現して聴き手にはっきりと伝える事は、彼ら自身にとって大きな経験となるだろう。

チャールズ・ローゼンは、音楽はしばしば言語だと言われ、言語と同じように意味を持ち、それはまた音楽と絵画を混同する所からも起きる。絵画も自然の模写と言われ、やはり言語だと言われている [7] と述べているが、ピアニスト・音楽評論家・理論家である彼の視点から見て、音楽が言語の様にはっきりとした意味を伝えるのは困難だが、音楽から言語を、言語から絵画的な情景を、すなわち音楽から絵画をイメージする可能性があることを示している。

ムソルグスキーは絵画的迫真性を持った描写でリアルな音楽的表現を試みて『展覧会の絵』を作曲しており、リストは『バラード第2番』『ダンテを読んで』などシューマンに劣らず文学的要素を音楽に持ち込み、一方では絵画的描写にも優れていた。そして印象派と呼ばれるドビュッシーは、自分の作品に名前を付けて『映像』第1集、『映像』2集などを始めとする多くの描写

的な作品を作曲している。この様に多くの作曲家が、自身の作品を通して音楽と絵画、音楽と文学の関わりを強く示している [8]。そしてシューマンが「画家は、詩を絵画にし、音楽家は音楽で絵を描く [9]」とかつて語ったように、楽曲をイメージして言語化、絵画化する事で奏者がより楽曲を表現し易くなるのではないかと考えられる。

Ⅲ 研究の目的と方法

1 研究の目的

本研究の目的は子どものピアノ演奏における楽曲理解、及び音楽表現の向上に対する「楽曲イメージ奏法」の効果について明らかにする事である。小学校で子どもたちは打楽器、オルガン、ハーモニカなど様々な楽器の演奏をしているが、楽譜通り正しく音を出す事にとらわれて、その曲のイメージを大切にしながら創造性豊かに演奏するという意識に欠けているのではないだろうか。本研究では「楽曲イメージ奏法」を取り入れて、本来は重要とされるべき子どもの世界観や感性を大切にしたい指導を行い、その効果について考察する。

2 研究の方法

研究期間

2012年12月～2013年2月

研究対象

小学1年生～小学6年生の8名

調査方法の概要

武本が提唱する「楽曲イメージ奏法」を元にして子どもが取り組みやすい内容に改善して実践する。この演奏法の概要は楽曲を分析したものを色、関連する言葉、絵などで表現して把握する。それらのイメージから誘導された奏法を使って表現するというものである。

今回は子どもにとって身近な題材を取り上げて、楽曲をイメージした物語を筆者とディスカッションしながら創作してそのイメージに合う色を色鉛筆で楽譜に着色する。着色を終えたら具体的にイメージした物語や場面について言葉にして、楽譜に書き込む。そして視覚的イメージをより深める為に、イメージするイラストや模様を加える事を課題にする。イメージが固まったら、レッスンでそれと一致する演奏をする為のタッチを誘導する。

研究手順

武本が提唱する研究手順は以下の通りである。

①導入…作曲家とその曲が作曲された状況と特徴を調べる

作曲家の生きた時代、人間性、生き方、環境、その曲に込められた想いなどを調べる

②言語化…漠然としたイメージを言葉に表す

初めてその曲に出会ったときのイメージを形容詞などで表す。(例：悲しい、明るい、勇ま

しい、可愛いなど)そしてなぜその様なイメージを受けるのかを考察する

③具体化…全体の構成の把握をして、細かなフレーズの意味付けや設定を行う

その曲について自分が持つイメージを文章にして物語全体を創作する。登場人物、場面設定、心情の変化など曲全体の物語を考えて完成させる

④着色…イメージに合う色を楽譜に薄く着色する

様々な色が持つイメージを自分なりに感じ取って場面に合う色を選び着色する(例:柔らかい→桃色、情熱的→赤、清涼感→水色など)

⑤タッチの誘導…物語のイメージに合うタッチを導く

自分が持っているイメージに近づく為にはどんな指の使い方、強弱、アーティキュレーションで演奏するのが効果的かを考えて演奏する。またレッスンの中で各場面に合わせた効果的な奏法で演奏できるように改善していく [10]

上記の研究手順を参考にして、今回の研究では以下の様に手順をアレンジして行う。

①導入…子ども自身が参考資料を探して調査する事が困難である為、必要に応じて筆者が情報提供してサポートする

②言語化…曲と出会った時の印象や、子ども独特のイメージを大切にしながら、筆者と対話してイメージ語を導き出す

③具体化…子どもが持つ世界観やイメージを元にして登場人物、場面設定、心情の変化など曲全体の流れを考えて、物語を創作する

④着色…普段から子どもたちの身近にある色鉛筆を使用して、自由に色を重ねたり濃淡を付けながらイラストを交えて着色する

⑤タッチの誘導…イメージを最大限に表現する為にはどんなタッチで演奏すべきかを、筆者が提案してタッチを誘導する

IV 研究の結果

1 子どものイメージ楽譜

子どもが学習した楽曲の中から3曲を抜粋して、曲名と創作した物語の特徴を示す。

①リヒナー作曲『忘れな草』(中間部)

物語の主役である動物の喜怒哀楽の変化を描写した作品

②ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「スティリアの女」(前・中間部)

お姫様2人が主役になって優雅にダンスを踊っている様子を描写した作品

③田丸信明作曲『ワルツ 春のよろこび』(後半)

自然の美しい風景を繊細にとらえて描写した作品

続いて上記3曲について、子どもが筆者と対話しながら考えた作品のイメージや創造した物語

を記載して、イメージした色やイラストを色鉛筆で着色した譜例を挙げ、その音楽的特徴と学習時における演奏の工夫と共に例示する。なお、特にそれぞれのイメージに特徴が表れていた部分と、ABA形式の曲については、メロディーが重複するAの部分について異なるイメージを考えるのが困難だったため前半のABの部分のみ抜粋している。

A リヒナー作曲『忘れな草』（中間部）

テーマ：うさぎとネコ

前半のあらすじ：仲良しのうさぎとネコがいた。ある日うさぎがいなくなりネコは悲しくて泣いた。そこへうさぎから手紙が届きネコはうさぎが病気になった事を知り、一緒に遊んだ日々を思い出しては涙を流した。ネコはうさぎのお見舞いに行く途中で迷子になったが、やっとの思いでたどり着いた。しかしそこにうさぎはいなかった…。

中間部のあらすじ：一方うさぎはお花に水をあげながらネコの事を心配していた。ネコはうさぎを探して船に乗り、波と一緒に心もドキドキさせながら、うさぎのいる島へ向かった。そしてうさぎとネコはようやく再会して、喜び合って仲良く遊んだ。

譜例 1

音楽的特徴…8分の6拍子のリズムに乗ってゆったりした優しいメロディーが始まる。

演奏の工夫…お花に水をあげるうさぎの気持ちになって、右手のメロディーをレガートで歌う様に演奏する。左手はメロディーを引き立てる様に丁寧に演奏する。

譜例 2

音楽的特徴…変ロ長調から平行調のト短調に転調した後、長く新しいフレーズが始まる。

演奏の工夫…転調と共に音色を変化させて、属七の和音は深い響きで演奏する。長く新しいフレーズが始まる部分は強弱の変化に伴って、音色や雰囲気を変化させる。

譜例 3

音楽的特徴…伴奏は強拍に休符があり、5拍目から始まるメロディーは徐々に上行する。
演奏の工夫…メロディーが4小節でひとまとまりとなる様に、フレーズを長く感じてのびのびと演奏する。伴奏は波の様に一定のリズムに乗せて、優しくなでるように。

譜例 4

音楽的特徴…重音のメロディーが終わり、アウフタクトを伴うメロディーが始まる。
演奏の工夫…フレーズの終わりの左手部分は丁寧に主音に解決する。新しいメロディーの付点四分音符は、肩の力を抜いて響かせる。嬉しい気持ちを想像して演奏する。

譜例 5

音楽的特徴…明るいメロディーの反復があり、次の転調に向けてリタルダンドしていく。
演奏の工夫…メロディーの反復部分は1回目と表現の違いを出す為に、音量や響きを大きくして、楽しい雰囲気表現する。効果的に音量を小さくして中間部の終結を迎える。

B ブルクミュラー作曲『25の練習曲』より「スティリアの女」(前・中間部)

テーマ：お姫様のダンスパーティー

全体のあらすじ：手拍子や足踏みをしながら可愛いお姫様が登場してお辞儀をする。回ったりステップを踏んだりして軽やかに踊りお辞儀をする。今度はゴージャスな大人っぽいお姫様が登場して踊り始め、くるくると回る。今度は2人で森の中で優雅に踊り、一緒にお辞儀をする。するとあちらこちらから2人のファンの人たちがたくさん集まってきて、今度はみんなの前で2人の華やかな踊りを披露する。

譜例 6

Mouvement de valse (♩=176) ワルツのように

音楽的特徴…前打音とアクセントによって1拍目が強調された4小節の前奏部分。

演奏の工夫…手拍子や足踏みをしているイメージで、3拍子をしっかりと感じ取り、はっきりとしたリズムで演奏する。4小節目の和音はお辞儀をするように少し優しく置く。

譜例 7

かわい
お姫さま
の
お
よる

音楽的特徴…左手の3拍子の伴奏と生き生きしたスタッカートのメロディー。

演奏の工夫…可愛いお姫様の踊りが始まる。アウフタクトの部分は焦らず大切に弾き始める。1拍目スタッカートの部分は軽く足踏みをする様に、優雅な響きで。

譜例 8

音楽的特徴…メロディーの頂点となる音を意識して高音を響かせる。8小節をひと息で。

演奏の工夫…ト長調のIの和音は落ち着いて、Vの和音は少し深い響きで、特に1拍目のベース音を響かせる。8小節をひとつのフレーズとして感じながら演奏する。

譜例 9

音楽的特徴…主調のト長調から平行調であるホ短調への転調と共に、曲想が変化する。

演奏の工夫…可愛いお姫様の後に大人っぽいお姫様が踊り出す。オレンジ系の暖色から紫系のクールなイメージに音色を変化させる。アクセントを強調してリズムカルに。

譜例10

A musical score for a piano piece. The treble clef part has a melody with eighth and sixteenth notes, some beamed together. The bass clef part has a simple accompaniment of chords. Handwritten purple and blue scribbles are present. The piece ends with a 'dim. rall.' marking. Fingering numbers 1, 2, 3 are visible at the end of the treble line.

音楽的特徴…前の小節から盛り上げて高音を響かせる。テンポを緩めて徐々に小さく。
演奏の工夫…複前打音とアクセントの拍は、ダンスしている少女がターンをする様にスピード感のある響きで。テンポを緩めてディミヌエンドする部分は柔らかい音色で。

譜例11

A musical score for a piano piece. The treble clef part has a melody with eighth notes and rests. The bass clef part has a simple accompaniment. Handwritten Japanese lyrics are present: 'in tempo', '2人でいっしょにまどろ', 'p 森の中でおどる', 'dolce', and 'ダンス'. There are colorful illustrations of two girls dancing. Fingering numbers 1, 2, 3, 4 are visible.

音楽的特徴…再びト長調に転調してテンポも元に戻る。連続する6度音程が特徴的。
演奏の工夫…可愛いお姫様と大人っぽいお姫様が2人で森の中で踊っているようにリズムカルに演奏する。6度の音程が連続する部分は2人が手を取り合って踊るように。

譜例12

A musical score for a piano piece. The treble clef part has a melody with eighth notes and rests. The bass clef part has a simple accompaniment. Handwritten Japanese lyrics are present: 'おどりが合 わさってさいこう のおどりになった。'. There are colorful illustrations of a sun and a star. A 'f' marking is present. Fingering numbers 1, 2, 3, 4, 5 are visible.

音楽的特徴…複前打音とアクセントを強調する。V→I和音で8小節を締めくくる。
演奏の工夫…1拍目にアクセントを付けて大切に感じると共に、3拍目から次の小節の1拍目への流れを作る。V→Iの部分は広がりを持たせて高音を響かせながら堂々と。

譜例13

A musical score for a piano piece. The treble clef part has a melody with eighth notes and rests. The bass clef part has a simple accompaniment. Handwritten Japanese lyrics are present: 'ファンの人たちも集まってくる', 'かわいい、ゴーストおひめさまは準備'. A 'f deciso' marking is present. Fingering numbers 1, 2, 4 are visible.

音楽的特徴…メロディーの13度、11度音程の大きな跳躍とその後のスラーが対症的。

演奏の工夫…大きな跳躍は弧を描く様に立体的に弾き、スラーはフレーズの終わりを伴うのでひとつひとつを丁寧に終結させる様に。左手のスラーは大切に歌う様に。

譜例14

音楽的特徴…引き続き12度音程の大きな跳躍が登場。最後は6度音程で解決する。

演奏の工夫…跳躍の部分は、はっきりとひとつひとつの音を刻む様に演奏する。8小節の締めくくりはスタッカートとは対照的なスラーを生かしてなめらかに演奏する。

C 田丸信明作曲『ワルツ 春のよろこび』（後半）

テーマ：春の風景

前半のあらすじ：桜の花びらがヒラヒラと風に舞っている。そよ風が吹き桜の花びらが美しく舞い散る。そこへ太陽の暖かい陽射しが差し込んでくる。

後半のあらすじ：雨が降って次第に強くなり、稲妻が光る。しばらくすると空が晴れて大きな虹がかかる。そして最後には晴れた空に更に大きな虹と桜が美しく輝く。

譜例15

音楽的特徴…二短調へ転調して悲しいメロディーになる。和音進行が小節毎に変化する。

演奏の工夫…音量は控えて転調と共に音色を変える。雨がしとしと降る情景を思い浮かべて、3拍子のリズムを噛み締めて演奏する。ペダルが濁らない様に踏み替えをする。

譜例16

音楽的特徴…メロディーが6度音程で上行して、重厚なV9和音から主和音に解決する。

演奏の工夫…雷が鳴り響く部分はバスとメロディーの音程の広がりを感じて重厚な音色で。2小節で音楽の流れが途切れない様に注意して、4小節をひと息で演奏する。

譜例17

音楽的特徴…先に出て来たメロディーに異なる伴奏が付いている。転調してへ長調に戻る。
演奏の工夫…ニ長調の悲しげな音色から少しずつ明るい音色に変化させる。リタルダンドとクレッシェンドは広がりを持たせて。イメージする色合いと共に響きも変化させる。

譜例18

音楽的特徴…2拍目に休符が入り、小節線をまたいだスラーによってリズムが変化する。
演奏の工夫…3拍目から1拍目にかかるスラーをなめらかに。和音と共に虹色に変化していく音色を感じて演奏する。休符の度に音楽が途切れない様に休符をしっかりと感じて。

譜例19

音楽的特徴…へ長調の主和音に解決する。曲の冒頭と同じハ長調のテーマが始まる。
演奏の工夫…へ長調主和音への終結は優しく丁寧に。ハ長調の優雅なテーマは大きな虹が架かる様にクレッシェンドを効果的に。2小節でメロディーが途切れない様に。

譜例20

音楽的特徴…冒頭と同じ8小節のメロディーが続く。最後はリタルダンドして終結する。
演奏の工夫…再現部の8小節のメロディーを冒頭の演奏と区別する為に、冒頭部分よりも響きや表現を豊かに。クレッシェンドとディミヌエンドは4小節間をひと息で効果的に。

2 音楽的特徴に対する思考の変化

各学習終了時に質問紙による調査を実施した。全20項目の音楽的特徴について「よくできた」(2点)、「まあまあ」(1点)、「できなかった」(0点)のいずれかに○を付けてもらい、集計してその推移をまとめた結果を表1～3に示す。

なお、全体的な研究にデータを使用する事については被験者の承諾を得ており、以下のデータは、今回の研究方法を説明して本人の承諾を得た上で掲載するものである。

表1 学習による音楽的な特徴(イメージ)に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識の変化(点数)			
		1回目	2回目	3回目	4回目
イメージ	1 雰囲気	3	4	6	9
	2 構成	4	5	4	7
	3 場面の变化	1	3	4	8
	4 音楽の方向性	2	4	5	7
	5 クライマックス	3	5	4	9
	6 強調する部分	4	6	6	10
合計		17	27	29	50

表1から、上記6項目の中で「場面の变化」については一番意識が低かったが、「楽曲イメージ奏法」の学習を重ねるうちに少しずつ意識できる様になった。同時に「雰囲気」「音楽の方向性」も徐々に意識できる様になった。学習終了時には上記の6項目の中で「強調する部分」についての意識が一番高かった。イメージに関する全ての項目において意識が高まっており、全体の点数にすると今回の学習によって約3倍に増加している。

表2 学習による音楽的な特徴(表現)に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識の変化(点数)			
		1回目	2回目	3回目	4回目
表現	1 強弱	3	3	8	10
	2 速さ	2	5	5	7
	3 メロディー	5	4	5	10
	4 曲想	5	6	7	9
	5 色彩	6	8	7	10
	6 音色	2	5	3	7
	7 響き	2	3	4	6
合計		30	34	39	59

表2に示すように「メロディー」「曲想」「色彩」については1回目の学習時から比較的意識が高かった。「メロディー」「色彩」についての意識が学習終了時には特に高かった。「速さ」「音色」「響き」は学習終了時において、比較的意識が低かった。表現についての意識を全体の点数の変化で見ると、今回の学習によって約2倍に増加している。

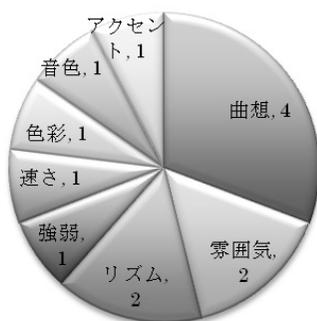
表3 学習による音楽的な特徴（奏法）に対する思考の変化

意識した事	具体的な視点	意識の変化（点数）			
		1回目	2回目	3回目	4回目
奏法・技能	1 身体の使い方	0	3	4	5
	2 リズム	2	3	4	7
	3 フレーズ	2	3	4	7
	4 レガート	3	4	5	6
	5 アクセント	4	4	5	7
	6 伴奏の効果	2	4	4	7
	7 集中	5	8	8	9
合計		18	29	34	48

表3の結果より「身体の使い方」は全20項目の中で、唯一全く意識されていなかった項目であり、4回目の学習終了時の意識も一番低かった。学習を始めて2回目で「集中」する意識が高まっている。表1や表2と比較すると、表3は比較的意識される項目が少ない。特に「レガート」については最後まであまり意識できなかつた。奏法・技能についての意識を全体の点数の変化で見ると、今回の学習によって約2.5倍に増加している。

次に各学習後の「改善点」について、同じ質問紙の自由記述の欄に自己評価を記入してもらい、その項目を集計してカテゴリ分析を行ったものをグラフ1～4に示す。

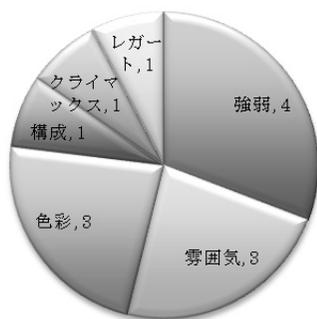
グラフ1 改善点
(1回目学習終了時)



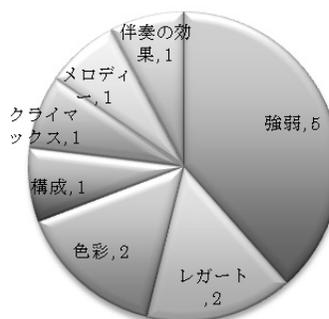
グラフ2 改善点
(2回目学習終了時)



グラフ3 改善点
(3回目学習終了時)



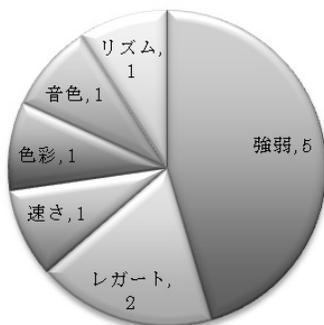
グラフ4 改善点
(4回目学習終了時)



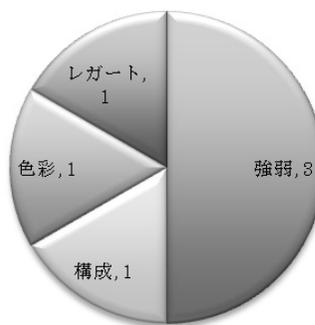
1回目の学習で一番改善できた点は「曲想」であり、次いで「雰囲気」「リズム」であった。2回目の学習終了時に改善できた主な点は「強弱」「メロディー」であり、「強弱」については3、4回目の学習終了時に最も改善されていた。

続いて各学習後に「次回の目標」について、同じ質問紙の自由記述の欄に子どもたちが記入した項目を集計して、カテゴリ分析を行ったものをグラフ5～8に示す。

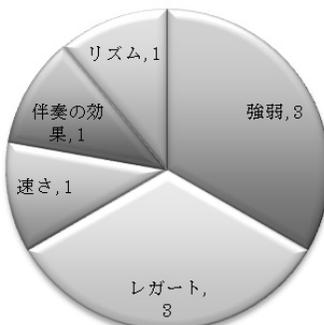
グラフ5 次回の目標
(1回目学習終了時)



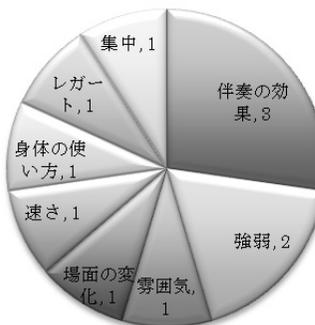
グラフ6 次回の目標
(2回目学習終了時)



グラフ7 次回の目標
(3回目学習終了時)



グラフ8 次回の目標
(4回目学習終了時)



初めての学習後に次回の目標にしたいと多くの子どもが挙げたのは「強弱」であった。2、3回目の学習後も同じく次回の目標に「強弱」を挙げる子どもが一番多かった。4回目の学習後はそれまであまり意識されていなかった「伴奏の効果」が次回の目標として一番多く挙げられており、項目は8項目に増えて、それまでに意識できなかった多くの事を意識して演奏したいという意欲がうかがえる。

V 「楽曲イメージ奏法」の効果に関する考察

以下に今回の「楽曲イメージ奏法」による効果を3つの項目に分類して考察したものを示す。チャールズ・ローゼンは音楽を理解するにはその意味に名札をつけるより、情緒がどう表現されているかを知ることのほうが大切であり、音楽的な感覚の意味をはっきりさせるには、それがど

れほど多様な表れ方をするか理解するのが一番良い [7] と述べている。今回の研究では彼が言うように、表現される音楽そのものの意味ではなく、奏者によってどう表現されて彩られるかという事に着目して考察したい。

1 楽曲のイメージが豊かになる

表1から、イメージに関する音楽的な特徴の中で「場面の变化」については一番意識が低かったが、「楽曲イメージ奏法」の学習を重ねるうちに意識できる様になった。譜例2、4、8、11、17の転調や、譜例4、13、17の強弱の変化と共に、子どもが創作したイメージには場面転換や主人公の心境の変化が見られる。ストーリーとは連続するものであり、子どもが自らそれを創作する事によって、明らかな「場面の变化」を感じ取り、変化を意識して演奏できるようになったと考えられる。

4回の学習終了時には「強調する部分」についての意識が一番高かった。譜例4のハートマーク、譜例12のキラキラマーク、譜例19、20の虹と桜などは、子どもが特に強調して伝えたい部分を表現している例であり、それらの部分は特に大切に表現していた。

Aの事例に見られるように、短調の悲しげなメロディーの部分でネコがうさぎを心配する気持ちに例えてイメージしたり、8分の6拍子のリズムを波の動きと不安な気持ちに例えてイメージする事によって、子どもが自ら創った物語の世界に感情移入できると考えられる。

Aの事例の子どもは、学習前よりイメージが大きく膨らんだ事によって、メロディーを表現豊かに演奏できるようになった。またBの事例では自分がお姫様になって踊っているかの様に立体的なイメージをして演奏する事ができた。そしてCの事例では雨、稲妻、太陽、虹、桜などメロディーや曲想の変化を自然の情景の変化と重ねてイメージしている。普段から身近にある「自然の情景」をテーマにする事によって、情景を想像しながら演奏する事が可能になったと考えられる。

表1の結果より「楽曲イメージ奏法」によってイメージに関する全ての項目において意識が高まっており、全体の点数にすると学習によって約3倍に増加している。AやBの事例の様に、実際にうさぎやネコ、お姫様になりきって心情や動きを表現するなど、彼らの体験に基づいてイメージを具体化する事によって、楽曲のイメージが膨らんで豊かな表現になったと考えられる。

2 音楽的な表現意欲の向上

表2に示すように表現に関する項目で一番意識の高まりが顕著だったのは「強弱」であり「メロディー」「色彩」に対する意識も学習終了時には特に高かった。「強弱」についてはグラフ2～7の改善点、次回の目標として子どもが多く挙げている項目でもあり、今回の学習において子どもたちが最も意識したい項目であった事がうかがえる。その証拠に古市は身体表現の観察調査において、2歳児は“大きい”“中くらい”“小さい”の区別を表現する多くの模倣（『お弁当箱』『誕生日イエイ』）ができる事を明らかにしている [11]。ダルクローズは子どもたちが強弱に対して敏感であるがゆえに、ダイナミクスの表現を体験することによって、鋭い聴覚と表現力を育

成しようとした [12]。実際に学習を重ねるうちに「強弱」を意識する事に伴って「雰囲気」や「音色」、「響き」にも変化が表れた。「強弱」を意識する事は今回の子どもを対象とした実践においてひとつの大きな鍵となった。

表現についての意識を全体の点数の変化で見ると、学習によって約2倍に増加しており、奏法・技能については約2.5倍に増加している。また表3の結果より学習を始めて2回目で「集中」する事が比較的できる様になっている。子ども自身による物語の創作によって多くの項目を意識する事に繋がり、楽しい学習だからこそ集中できるのではないだろうか。

Aの事例の子どもは、大好きなうさぎとネコを主役にして物語を創作する事によって、物語を創る過程もとても楽しんでいて。そして何もイメージしないで演奏していた時と比較すると、理想の音色で弾きたいという意欲が出て来ている事が演奏する姿勢や表情からも見られた。4回目の学習後に「お話を創って色塗りするのが楽しかったから、これから演奏する曲もイメージして色塗りしたい」と話している。この様に子ども自身が学習過程を「楽しかった」と感じる事が、表現意欲に繋がっている。

Bの事例では可愛いお姫様と大人っぽいお姫様の2人を主役にして、優雅にダンスを踊る物語を創作した事により、自ら憧れのお姫様になりきってドレスを着て踊っているかの様に優雅に演奏する事ができた。複前打音の部分をダンスのターンに例える事によって、美しいリズムや響きを表現したいという意欲に直接繋がった。これらの事から「楽曲イメージ奏法」の学習により子どもたちの表現意欲が向上している事がうかがえる。

3 視覚的な楽曲分析の効果

「色彩」については表2に示す様に学習毎に徐々に意識が高まり、グラフ1～6の項目としても毎回挙げられていて、比較的意識されていた。

Bの事例において譜例7、8の明るいメロディー部分では、オレンジ色のドレスを着た可愛いお姫様が踊り、譜例9、10の少し哀愁のあるメロディー部分では、紫色のドレスを着た大人っぽいお姫様が踊るというイメージをしている。オレンジ色をイメージしながら明るい音色を表現して、紫色をイメージしながら哀愁のある音色を表現する事で、それぞれのメロディーのキャラクター性やタッチの変化を相対的に意識して演奏する事ができた。このようにイメージする色の違いによって表情を変えるのは、音色の変化を表現する上でとても効果的である。

そしてCの事例では雨は水色、稲妻は黄色、虹は七色、桜はピンク色という様に、各場面を自然のイメージに合う色で彩っている。水色は寂しげに、黄色は元気に、ピンク色は柔らかくといった様々な音色を表現できる様に、タッチの指導をした。具体的に思い浮かべる情景の色彩を意識する事が、強弱、曲想を付ける事に直接反映している。

アルシュウラ、ハトウィックは色彩を通して現れた個々の子どもの心の動きについての研究結果として、暖色を好む子どもたちの比較的自由に気楽な感情表現をする傾向があり、寒色系を好む子どもたちは内部感情を抑制する傾向があった。また子どもたちが好んだ色と、彼らの特徴を

キーワードでまとめると、赤色→愛情・敵意、青→抑制・不安、黄色→幸福・目立つ、緑→静か、抑制的であった [13] と示している。これらを参考にして今回の研究の考察をみると、長調の明るいメロディーは暖色系、短調の寂しげなメロディーは寒色系で着色される傾向があった。また譜例3の赤いハートマークは気持ちの高揚を表現しており、譜例16の稲妻は目立たせたい部分として着色している事が見えてきた。

VI 保育者養成校の学生との比較

2011年後期「幼児の音楽」の授業で、筆者が行った保育者養成校の学生に対する「楽曲イメージ奏法」の実践と今回の研究を比較すると、学生は学習前に「色彩」「構成」「身体の使い方」についての意識が特に低いのにに対して、子どもは「場面の変化」「身体の使い方」についての意識が低かった。「身体に使い方」については学習後にどちらも大きな意識の変化は見られなかった事から、意識することが難しい項目であった事が分かった。学生が学習後に意識がとて高くなった項目は「雰囲気」「音楽の方向性」「強弱」「集中」であり、子どもは「強調する部分」「強弱」「メロディー」「色彩」についてとても意識が高くなった。「強弱」についてはどちらの研究においても意識が高かった。

それぞれのイメージ楽譜を比較すると、学生は強弱の違いを色の濃淡で表現したり、主人公の微妙な心の変化を表現する為に、何度も異なる色を重ね塗りしているの、全体的に中間色が多い。それに対して子どもは、単色が多く比較的鮮やかな原色を中心に着色している。学生は子どもよりも人生経験が抱負であり、イメージ楽譜に着色する際に、曲や気持ちの変化を彼らの経験に基づいて忠実に表現する為に、深みのある色を着色していると考えられる。

イメージ楽譜において着色に使用している色は、おおむね共通して以下の通りである。橙色＝嬉しい・楽しい、水色＝涼しい・寂しい、紫色＝不安・大人っぽい、黄緑色＝爽やか、ピンク色＝柔らかい・幸せ。更にこれらに加えて、学生のイメージ楽譜ではピンク色、黄色、水色、紫色を全て混ぜた色によって、複雑な心境を表現している部分や、ピンク色、紫色、黄緑のグラデーションによって期待感を表現している部分などがある。

創作した物語を比較すると、学生は主人公が大人で人生観や自らの経験、自然の情景について創作した物語が多く、子どもは少女や動物が主役となる物語が多かった。それぞれの世代によって視点の違い、経験の違いがあるためにこの様な違いが出るのではないだろうか。「楽曲イメージ奏法」は学生も子どもも、楽しみながら表現力を身に付ける事ができるという点において、どちらも共通しているが、経験が豊かなほうがより表現の幅が広がって深みのあるイメージや表現が可能となる。

VII 「楽曲イメージ奏法」の効果について

「楽曲イメージ奏法」の実践によって、イメージ、表現、技術・奏法に関する全ての項目において意識が高まっていた。楽曲のイメージを具体化して、動物やお姫様になりきって心情や動き

を表現する事によって、楽曲のイメージや表現を豊かに演奏する事ができた。そして好きな動物や憧れの衣装を着て踊っている様子などをイメージして演奏する経験によって、美しいリズムや響きを表現したいという意欲に直接繋がって、とても表現豊かに楽しく演奏する事ができた。これらの事から「楽曲イメージ奏法」の学習によって子どもたちのイメージが豊かになり、表現意欲が向上している事が明らかになった。また各場面のイメージに合わせた様々な色で着色して、その色彩に合う表現ができる様に、タッチの指導をした。このように具体的に思い浮かべる色彩を意識したタッチで演奏する事は強弱、曲想を付ける為の手がかりとなった。

これらの結果からピアノ演奏も歌を歌う時の様に、イメージした情景を思い浮かべながら演奏できたら、それは子どもにとって楽しく、表現が豊かになる手がかりとなるのではないかという仮説は証明された。

永富は、自身の体験を通してピアノの演奏には、レガート、レガータティッシモ、ノン・レガート、スタッカート、スタッカティッシモ、ポルタート、マルテラートの7種類のタッチが必要であり、それを縦横に駆使できてこそ多彩な演奏も可能になる [14] と述べているが、今回の研究ではこの7種類の中で主にレガート、スタッカートを中心に指導したが、今後は更に多彩な音色を追求しながら、様々なタッチの習得も目指して指導していきたい。

VIII おわりに

今回の「楽曲イメージ奏法」の実践により保育者養成校の本学の学生のみならず、子どもたちもピアノ演奏時において、楽曲のイメージ・表現意欲の向上・楽曲分析をする上で大きな成長を遂げた。筆者は今後も、この「楽曲イメージ奏法」について更に研究を深めて、技術ばかりが優先されて音に対するイメージネーションに欠けているという昨今の傾向を少しでも食い止めて、楽曲をどう演奏したいのかを考えるきっかけを創っていきたい。

引用・参考文献

- [1] 小学校学習指導要領
- [2] 西濱由有『保育者養成校のピアノ演奏指導における「楽曲イメージ奏法」の効果に関する研究』『東邦学誌』第41巻 第1号 愛知東邦大学、2012年、p.18.
- [3] 加藤晴子、伊達優子「自ら思考するピアノ表現学習における学生の意識の変容—イメージ描写からのアプローチを例に—」『岐阜聖徳学園大学紀要』教育学部編 第48巻、2009年、p.101.
- [4] 夏目佳子「曲想表現を豊かにする子どものためのイメージ演奏法の検討—ドビュッシーのピアノ曲『子供の領分』より「象の子守歌」からの検討—」『岡崎女子短期大学研究紀要』第38巻、2005年、p.118.
- [5] 小林仁『ピアノが上手になる人、ならない人』春秋社、2012年、p.99.
- [6] ゲルハルト・マンテル『楽譜を読むチカラ』音楽之友社、2012年、p.162.
- [7] チャールズ・ローゼン『音楽と感情』みすず書房、2011年
- [8] 野村三郎『「音楽的」なピアノ演奏のヒント』音楽の友社、2012年
- [9] 檜山乃武『音楽家の名言』株式会社ヤマハミュージックメディア、2012年、p.89.

- [10] 中田京子『先生と生徒のための楽曲イメージ奏法』ドレミ楽譜出版社、1995年、pp.11-15。（本文中の武本京子と著者の中田京子は同じ人物である。）
- [11] 古市久子「幼児の身体表現の特徴と手遊びの習得プロセス—3歳までの事例を通して—」『エデュケア』第26号、2005年、p.5.
- [12] エルザ・フィンドリィ『リズムと動き』全音楽譜出版社、1973年、p.18.
- [13] アルシューラ、ハトウィック『子どもの絵と性格』文化書房博文社、2002年
- [14] 永富和子『もっと楽にピアノは弾ける』学研、1996年

受理日 平成25年 3 月29日